

調査報告

トロス司教座聖堂出土碑文の概要(五)二〇一四年度の発掘から

師 尾 晶 子

キーワード


碑文 スポリア 転用材 顕彰像台座 司教座聖堂 トロス リキア

二〇一四年度の調査で発見された碑文は、聖堂南側廊外側の付属礼拝堂および外拝廊から外部へ通ずる南西通路の堆積土と瓦礫を除去した際に出土したものに限定された。すなわち、礼拝堂第2室から発見されたものが三点、南西通路に据え付けられた形で埋もれていたものが一点、瓦礫除去の作業過程で放置されていた石(G-57)が移動されたことによって碑文の存在が明らかになったものが一点であった。その他、内陣の床面を出した際に、内陣を仕切る敷石に刻まれていた石工によるマークが数点確認された。碑文のうち一点は、二〇一〇年度に確認されていた碑文断片G-52と同一の碑文に属することが確認された¹⁾。


以下、本年の調査で出土した碑文の概要について報告する。

(一) 礼拝堂第2室出土の建築部材に転用された顕彰像台座(図1a、図1c)

現存部分、横幅最大〇・四メートル、高さ(縦)〇・二九メートル、厚さ〇・三八メートルの石灰岩の台座断片。碑面をのぞきオリジナルの面は残されていない。正面と右側面のエッジは一見するとオリジナルのように見えるが、断面はかなり粗くカットされており、そう考えるのは難しい。転用時に切り落とされた断面がそのように見えるだけだと思われる。発見場所からして、聖堂の南壁の壁材とし

て再利用されていたものが落下して埋没していたものと推測される。この石は、その発見場所、内容、字体と刻文の特徴から、二〇一〇年度の調査で聖堂の南壁外側に瓦礫として積み重なり放置されていた石（G-52、1c）と同じ碑文に属することが明らかになった。G-52は現在おそらくフェティエ博物館のデポに収蔵されており（未確認だが現地から運び出されている）、今回両石を実見して比較検討することはできなかった。

新断片となる今年度出土の碑文の現存部分は三行からなる。一行目と二行目の間隔が〇・〇五メートルあまりと大きくあいている。現存部分に文字は刻まれていないものの、後述のように、この間隔は一行分にあたる。一行目の文字は、二行目、三行目に比して小さく刻まれている。すなわち、一行目の文字の高さは〇・〇〇二二〜〇・〇〇二五メートル（オミクロン [O] の直径は〇・〇〇二三メートル、イオタ [I] は〇・〇〇一八五メートル）、行間は〇・〇〇一〇・〇〇一四メートル、二行目および三行目の文字の高さは〇・〇〇二九〜〇・〇〇三五メートルで（オミクロン [O] の直径は二行目の一つ目が〇・〇〇二九メートル、その他は〇・〇〇三二メートル、ミュー [M] は高さ〇・〇〇二九メートル、ベータ [B] は高さ〇・〇〇三五メートル）、二行目よりも三行目が若干大きめに、また間

隔も広めに刻まれている。アルファは水平線がくさび形に曲がったアルファ（）が用いられており、オメガは通常のオメガ（Ω）が用いられている。全体的に典型的な一〜二世紀の字体である。

新断片の碑文は空白行を入れて四行で、*...ΑΠΟΔΕΔΕΙ vacat* [---ΦΙ]ΛΟΡΩΜΑΙΟΙ [---ΣΕ]ΒΑΣΤΟΥと読める。二〇一〇年度に発見されたG-52は四行のうち最初の三行がのこされていた。すなわち、*ΟΣ Υ---ΓΜΕΝΩΙ* --- [---ΦΙ]ΛΟΚΑΙΣΑΡΕΣ---と読めていた。両断片の状況から、[---ΣΕ]ΒΑΣΤΟΥが碑文の末部であると考えてよいだろう。上部がどれほど欠落しているのかについては不明である。

G-52と新断片とを合わせると、おおむね次のようなテキストが復元できる。

- 1 *...ΟΣ ΥΠΤΑΤΩΙ ΤΟ -, ΥΠΤΑΤΩΙ ΑΠΟΔΕΔΕΙ*
- 2 *ΓΜΕΝΩΙ [ΤΟ -],*
- 3 *[ΦΙ]ΛΟΚΑΙΣΑΡΕΣ [ΚΑΙ ΦΙ]ΛΟΡΩΜΑΙΟΙ*
- 4 *[ΤΟΥ? ΣΕ]ΒΑΣΤΟΥ*

トロス司教座聖堂出土碑文の概要 (五) 二〇一四年度の発掘から (師尾)

1 ---[παρὶ παρῖδ]ος, ὑ[πάτω]ι τὸ -, ὑπ[άτω]ι ἀπο-

δεδει

2 γυένωι [τὸ -],

3 [-----φ]ιλοκαίσαρες [καὶ φ]ιλοσεβαστοί

4 [του? Σε]βαστοῦ

具体的にどの皇帝を指しているかは明らかではないが、現存部分を復元とともに訳出するなら、おおむね以下のような内容となる。「---、祖国の父、コンスル〇回目、予定コンスル〇回目（たる皇帝〇〇）に、『皇帝を愛する者たちにしてローマ人を愛する者たち』・・・が顕彰した。」

刻文の特徴としては、顕彰者らの方が被顕彰者たる皇帝の名よりも大きく目立つようにデザインされていることがあげられる。顕彰碑文によく見られる特徴の一つである。また被顕彰者は、二行目から明らかなように与格で表されている。

「皇帝を愛する者たちにしてローマ人を愛する者たち (philokaisar kai philoromaios)」という称号は、他地域では知られているが、リキアでは公刊されている碑文を見る限りでは初出である。類例としては、トロス出土の顕彰碑文で「愛帝者にしてローマ人を愛する者 (philosebastos kai philoromaios)」を顕彰したものが知られるが、これ

が唯一の事例となる³⁾。公刊碑文を見る限り、リキアでは「愛

国者 (philopatriis)」の称号は比較的よく使われているが、「皇帝を愛する者 (philokaisar)」、「ローマ人を愛する者 (philoromaios)」、「愛帝者 (philosebastos)」とったローマないしローマ皇帝を崇敬する表現は上記のトロス出土の碑文をのぞいて知られていない。出土碑文で「皇帝を愛する者たちにしてローマ人を愛する者たち」という称号をまとった者たちがどのような役職者あるいは身分の者なのかについては現時点では判明しない。

(二) 礼拝堂第2室出土の建築部材に転用された顕彰像台座 (図2a、図2b)

礼拝堂第2室のより祭壇部に近いところから出土したこの石は、横幅最大〇・六四メートル、高さ最大〇・三七五メートル、厚さ〇・〇二八メートルの碑文断片。底面はオリジナルである(図2b)。現存する碑文は末部の三行である。文字の高さは〇・三〇三〇・〇三六メートルで、オミクロン(〇)およびシータ(Θ)は真円形に近く、直径は〇・〇三五〇・〇三六メートルである。水平線がくさび形に曲がったアルファ(Α)が用いられている。字体からは一、二世紀のものである可能性が高い。

現存の文字から、リキア人のコイノンによるアウグスタ

(Sebaste) の称号を持つ女性への顕彰であることがわかる。被顕彰者であるアウグスタは対格であらわされている。確実に読めるのは [---Σ] ἐβαρτην [---] οὐ θυγατὶ | πα Αὐκίας | υ τὸ Κοῖνον (〇〇の娘である〇〇・アウグスタをリキア人のコイノンが「顕彰した」と復元できる。一行目および二行目の欠損部分に入る固有名詞は明らかではない。ただし、リキア人のコイノンによる顕彰であること、被顕彰者がアウグスタの称号を与えられていること、三行目から欠損文字数が七、八文字と想定されることから、安易な同定はできないものの、ある程度絞ることは可能だと思われる⁽³⁾。

(三) 礼拝堂第2室出土の建築部材に転用された碑石の断片 (図3 a ~ 図3 b)

二つに割れた状態で出土した碑文の断片二片。断片Aにオリジナルの底面が残されている (図3 b)。現存部分の碑面は、断片Aが幅最大〇・一一メートル、高さ最大〇・一二五メートルで、断片Bが幅最大〇・一三五メートル、高さ最大〇・一六五メートルである。二断片を接合すると、高さは〇・二九メートルほどになる。上記 (二) の碑文断片とほぼ同じ場所から出土した。碑文の現存部分は五行からなり、最終行と底面との間は行間は〇・一六五メートル

ある。文字の大きさは〇・〇二五〜〇・〇三メートル。水平線が直線のアルファ (Α) が用いられている。石の形状、刻文のスタイルから、顕彰碑と思われる。二行目 Ρ・ΝΑΡΙΧからアウレリオス・ラリオス ([Αὐ] ρ(ήλιος) Ἀδριχος) なる人物がおそらく被顕彰者であると推測される。三行目 ΤΙΟΝΗはおそらく ἐκγονος の女性形の変化形 (すなわち女孫) と思われるが、前後関係は現時点では不明である。五行目すなわち最終行の ΜΗΤΡ. は μητρόπολις の部分で、顕彰主体たる「リキア人のエトノスのメトロポリスであるトロス人のポリス (あるいは参事会と民会など)」を示す句の一部と考えられる。

(四) 水盤として再利用された葬礼記念碑 (図4 a ~ 4 c)

南側の外拝廊からクロノス神殿方面に連なる付属礼拝堂の西側を通る通路から発見された。発見時の状況については本誌浦野論文の該当ページを参照されたい。上部の凸状輪郭装飾 (モールディング) の縁の部分が切り落とされてすり鉢状に削られ、おそらくは水盤として利用できるように加工されていた (図4 c)。高さは現存〇・四七メートル、直径〇・四七メートルで、上部が切り取られる前の高さは〇・五五メートル程度であったと思われる。碑面の大部分はのみで粗くつぶされており、ほとんど読みとれない状況

トロス司教座聖堂出土碑文の概要 (五) 二〇一四年度の発掘から (師尾)

になっている。文字高は〇・〇一八メートル、〇・〇二三メートルで、アルファは水平線がくさび形に曲がったアルファ (A) が用いられている。刻文されていたことが確認できるのは四行であるが、さらに中央部分のみ下方に三行分つぶされたノミ痕がある。碑面の左側に縦横〇・〇三四メートルの十字が刻まれているが、本来の用途を終えた後、どの時点で加えられたものかは不明である。

(五) 聖堂南壁の壁材に転用された顕彰像台座と思われる碑文断片 (G-57、図5a、図5c)

聖堂南壁の外側に積み重なっていた瓦礫群の一つで、二〇一〇年の調査でG-57と番号をつけられていた石 (図5c)。二〇一〇年の時点では碑文の存在に気づかなかったが、石が移動されたことでその存在が明らかとなった。横幅最大〇・三四メートル、高さ最大〇・二九メートル、厚さ最大〇・七二メートルの碑文断片。碑面は、横幅〇・二四メートル、高さ最大〇・二五メートル。文字の高さは〇・〇三四、〇・〇三七メートルで、深くくつきりとノミで刻まれている。目視することはできなかったが、底面が残されているように見える (図5b)。文字の残されているのは二行のみで、---ΑΣΤ--- ---ΟΝΣと読める。一行目はおそらく Σεβαστός の与格か対角形、二行目は顕彰主体

たる Τρωέων ἡ πόλις (トロス人のポリス) あるいは Τρωέων ἡ πόλις ἡ τοῦ Αγκίαν ἔθνους μητρόπολις (リュキア人のメトロポリスたるトロス人のポリス) といった表現の末部だと思われる。

註

- (1) 師尾晶子「二〇一〇年度発掘調査によるトロス教会聖堂出土碑文の概要」『史苑』七一・二(二〇一一)一一六頁参照。
 (2) 顕彰碑文および顕彰像における顕彰者と被顕彰者との関係については、ローマ時代を対象としたものではないが、J. Ma, *Statuses and Cities: Honorific Portraits and Civic Identity in the Hellenistic World*, Oxford 2013, 15-62を参照。

- (3) TAM II 647, 2-3: [φι]λοσε[[βατόν τε καὶ φι]α]ορώμα[[ον]. *philokaisar* および *philangustus* はともにカエサルないしアウグストゥスの称号を有する皇帝に対する崇敬者をあらわす表現として使われ、直訳すればどちらとも「皇帝を愛する者」となる。「ローマを愛する者」(*philomaios*)と同様に、何ら実態をとまなわない「皇帝親派」「皇帝びいき」を示す表現ではなく、当該ポリスにおいて重要な役職についていた者や集団、とりわけ皇帝礼拝にかかわる神官職についていた者や集団に与えられた名誉称号と解釈されよう。L. Robert, “Le culte de Caligula à Milet et la province d’Asie,” *Helvénica* 7 (1949) 206-238, esp. 211-212; C. Veligianni, “*Philos und Philos-Komposita in den griechischen Inschriften der Kaiserzeit*,” in M. Peachin (ed.) *Aspects of Friendship in the Graeco-Roman World* (JRA Supplementary Series 43) 2001, 63-80を参照。

- (4) ちひあたりの候補としては①ティトゥス帝の娘ユリア・アウグスタ (TAM II 506, col. I, 1-5: Ἰουλιαν Σεβαστην θυγατέρα θεοῦ Τίτου Πτωπάειον ἡ βουλῇ καὶ

- ο δῆμος, Διοτρίαν [βιταν])、②ディミティア・アウグスタ (TAM II 559 [トロス])、③サビナ・アウグスタ (TAM II 560 [トロス]) などが挙げられるが、皇帝の妻としてではなく、娘であることが強調されていることからユリア・アウグスタの可能性が一番高いだろうと現状では考えている。

- (5) A *Lexicon of Greek Personal Names* Vols. I-V.B (Oxford 1987-2013) によれば、Larichos とは名は、Λαριχίαινεで三例、また小アジアで一〇例知られている。うち一例はクサントス出土の TAM II 300, 6 (二世紀) およびアテナイ出土の SEG 26, 128, 6 (IG II² 1109 + 2771 + 3412) (一八六あるいは一八七年) から知られる同名の Aurelios Larichos なる人物で、小アジアでプロクラトル職についていたこと、ギリシア語書簡長官職 (*ab epistulis Graecis*) に登用されていたことが両碑文から知られている。トロス出土の碑文にあらわれる同名の人物が同一人物であると断言することはできないが、その可能性は高いと思われる。A. E. Raubitschek, “*Commodus and Athens*,” *Hesperia* Suppl. 8 (1949) 286-290, J. H. Oliver, “The Sacred Gerusia and the Emperor’s Consilium,” *Hesperia* 36 (1967) 332-333を参照。

(千葉商科大学商経学部教授)

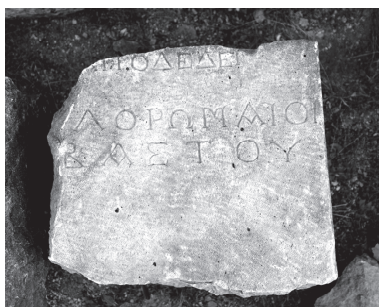


図 1a



図 1b



図 1c

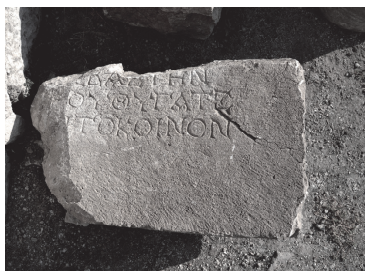


図 2a



図 2b



图 3a



图 3b



图 4a



图 4b



图 4c



图 5a



图 5b



图 5c (G-57, 2010 年)

The Basilica Project, 2014: Inscriptions

MOROO, Akiko

In 2014 we found five inscriptions during the removal of rubbles and soils in the southern external area of the basilica. A brief description and their photographs are posted.

Four of them are honorary inscriptions and were reused as wall materials for the southern wall of the basilica. Inscription No. 1 belongs to Inscription No. 2 of 2010 report, and it positions at the right side of the latter. The title of *‘philokaisares kai philoromaioi’* is notable. It is interesting to see the name of Aurelios Larichos in Inscription No. 3 because a person of the same name and of the same period is known from *TAM* II 300 and *SEG* 26. 128. An altar grave reworked as a kind of a basin was also unearthed.

ト
ロ
ス
司
教
座
聖
堂
出
土
碑
文
の
概
要
(五)
二
〇
一
四
年
度
の
発
掘
か
ら
(師
尾)